

令和5年度 山梨県立富士見支援学校評価報告書(自己評価・学校関係者評価)

山梨県立富士見支援学校校長 小倉正一

学校目標・経営方針	児童生徒たちの病状に配慮し、健康の回復を図りながら、義務教育における学習空白を補完するとともに、社会の中で人と関わりながら生きていくための力を育む
-----------	---

本年度の重点目標	1 児童生徒の実態に即した支援や学習指導を行い、一人一人の確かな学力を育む。
	2 健やかな心身の涵養とよりよい人間関係の形成を図り、社会に参加する態度を育成する。
	3 病弱教育に関する専門性の充実を図り、信頼される学校づくりを行う。

達成度	A ほぼ達成できた。(8割以上)
	B 概ね達成できた。(6割以上)
	C 不十分である。(4割以上)
	D 達成できなかった。(4割以下)

評価	4 良くできている。
	3 できている。
	2 あまりできていない。
	1 できていない。

自己評価			
本年度の重点目標			
番号	評価項目	具体的方策	方策の評価指標
1	児童生徒の実態に即した支援や学習指導を行い、一人一人の確かな学力を育む。	個別の指導計画に基づいた学習の状況や結果を適切に評価し、教科間でのカリキュラムマネジメントを行いながら教科横断的な指導の改善を図る。 ICTの活用や体験的活動など、指導法を工夫することにより、わかる喜びを実感できる授業を行い、基礎的・基本的な知識・技能の定着を図る。	児童生徒・保護者アンケート、学部会での検証(満足度80%)
2	健やかな心身の涵養とよりよい人間関係の形成を図り、自立を目指す態度を育成する。	教育課程に児童生徒の心身の状態を考慮した系統的・体系的なキャリア教育を位置づけ、その充実を図る。 道徳教育や保健教育と関連させ学校生活全体を通して、自他を大切にすることを育て、基本的な生活習慣を身につけさせる。	児童生徒・保護者アンケート、学部会での検証(満足度80%)
3	病弱教育に関する専門性の充実を図り、信頼される学校づくりを行う。	積極的な情報発信を行い、病弱教育への理解と啓発に努めるとともに、関係機関との連携を充実させる。センター的機能を発揮して、通常の学級の在籍者を含む地域の児童生徒を支援する。 専門性の向上、研究・研修の充実を図る。	児童生徒・保護者アンケート、学部会での検証(満足度80%)
4	多忙化の改善を図り、効率的な学校運営を目指していく。	児童生徒・保護者・関係機関等との対応及び会議の延長における時間外勤務の振り替えを適切に行うことにより、教職員の多忙化・多忙感の解消に努める。また、定時退庁日を確実に実行するようにし、無理な場合は同じ月内で個々に振り替えを行う。	教職員アンケートによる検証

年度末評価(月日現在)		
自己評価結果	達成度	成果と次年度への課題・改善策
・個別の指導計画については、本年度も学期ごとに検証を重ね、指導の改善を図ることができた。また、必要に応じて情報交換を行うことで、教科横断的な指導の向上を図ることができた。 ・各授業においてICTを適切に活用し学習を進め、指導の工夫が行われている。 ・生徒の実態に即した支援の検討の一つとして情報活用能力チェック表の作成を進めている。 ・PTA研修会で保護者のICTへの理解促進を図った。	A	・PDCAサイクルによる指導改善を徹底しながら、質の高い教科横断的な学習指導を実施していく。また、児童生徒の実態に合った確かな指導計画を検討し、計画していく。 ・ICTの効果的な活用実践を積み重ね、児童生徒の主体的な学びの実現を図る。 ・情報活用能力チェック表を活用しながら授業改善に生かす。
・本年度も各児童生徒の実態把握を必要なタイミングで行い、その都度身に付けさせたい力を教員間で確認し進路指導年間計画も参考にしながら支援方法を検討・実施できた。 ・中学2年生以下の児童生徒や保護者に対して必要に応じて中学、高校の情報提供を行った。 ・中学2年生の職場体験を生徒の実態に応じて早い段階で計画し実施することができた。保護者を含め、キャリア教育の意識を高められた。 ・基本的な生活習慣について「自分でできる健康な生活」「免疫ケア」「ハンドケア」の動画視聴を通して児童生徒全体に意識させることができた。また、Formsでの健康管理を習慣化させることができた。長期休業中は、同じシステムを使い生活リズムを崩さないような取り組みを行った。	A	・来年度も児童生徒の的的確な実態把握を行うとともに教員間の共通理解を丁寧に適切な支援を検討する。 ・来年度も職場体験や学校見学(前籍校や進路希望先の学校)を児童生徒の実態に応じて計画・実施する。 ・基本的な生活習慣に関して、児童生徒や保護者、教員間で意識することができた。来年度以降は、医療の協力体制を維持しつつ、児童生徒の生活リズムの確立を目指したい。 ・医療や保護者と密に連携し、心身の状況を把握・調整しながら行う学習活動を今後も計画的にさらなる充実を図る。
・医療機関及び保護者向けセンター的機能説明リーフレットは折に触れて関係者に説明、配付した。また学校向けリーフレットを作成し、学校への訪問支援や研修支援、病弱連携会議でも配付して周知に努めた。 ・センター的機能での支援ケースは12月末現在で31件となり、通常級在籍者には14件対応した。31件のうち、中央病院との連携は9件、中央病院医療提携病院との連携は4件で、医療とタイムリーに情報共有を行い、支援の方向性を確認しながら児童生徒保護者、学校に対応した。 ・起立性調節障害等の病気のため、学校生活に困りを抱える高校生へのサポートに繋がるよう、高等学校教員向けリーフレット作成し、周知を始めた。 ・病弱連携会議では、ニーズに沿った研修会を企画実施し、病弱学級担任や地教委担当者より好評を得ている。 ・配置された心理士による校内研修会を3月までに3回企画し、基本となる理論や具体的な対応方法などを学ぶ機会をもった。	A	・学校とのこじれがあるケースが多い中で、医療等外部機関に繋がっていない場合は、今後も配置された心理士の助言を受けながら、学校が主体となって支援を続けられるようにサポートしていく。 ・慢性疾患等を抱え、高校生活で困っている高校生への支援は、県内ではまだ進んでいない分野であるが、本校の専門性を、発揮できるよう、今後も周知していく。 ・病弱学級担任が毎年7割以上が入れ替わり中、子どもの課題解決が先送りされることもある。センター的機能での支援を周知し、個別のケースに対応することで不適応の未然防止に寄与していく。 ・配置された心理士による研修会は、教員のニーズを把握する中で今後も企画し、本校の教員の専門性向上に務める。
・時間外勤務の振り替えは、長期休業中や平日の放課後など、教職員が個々の都合に合わせて適切にとることができていた。定時退庁日の退庁ができなかった場合は、いつ振り替えをするか職員室のボードに見える化し、実行するようにした。年休取得日数の平均は昨年度の12日から16日へと大幅に増えた。	A	・時間外で働いた分は必ず休むという習慣が定着している。年休の取得日数も増えて、ワークライフバランスがとれてきている。 ・来年度は、これらの取組を継続し、年休取得日数平均16日を維持したい。

学校関係者評価	
実施日(令和5年2月17日)	
評価	意見・要望等
4	・支援学校として、症状や特性に合わせた目標や方針の設定ができていると思う。 ・アンケートから、児童生徒の習熟度に応じた丁寧な指導が行われている様子がうかがえる。 ・40周年記念作品をひとつの機会としたICT活用は、児童生徒が目標をもちやすくその学習効果も高かったと考えられる。実際に完成した作品はとても素晴らしく、教職員によるサポートと児童生徒のICT学習の習得力の高さを感じた。
4	・日頃の教育活動に加え、各種行事やイベントが設定されており、児童生徒の経験を増やす工夫がされている。教職員による丁寧な実態把握と手厚い教育・支援が行われている。 ・学校と地域の連携やICT・リモートを活用して、多様な人や職業を知る機会が作れると良いのではないかと感じる。
3	・もしかするとこちらの役割が大きくなっていくのかもしれない。各学校への周知や体制の見直しが必要になってくるかもしれない。 ・関係機関の担当者交代等で連携に苦慮されている様子がみられたが、状況に応じた関係構築に取り組み、連携の充実が促進されている様子がうかがえた。 ・在籍期間の長期化の背景にある家庭環境による登校の不安定さを有する事例に対する実績をもとに、センター的機能としての近隣学校への早期の介入も検討されたい。 ・年間を通じて研修会が設定され、専門性の向上に向けて学校全体で努力している様子がわかる。
4	・校長先生が勤務の振り替えを積極的に行う環境を整えている。自らが率先して行事などにも参加されている様子がわかり、働きやすい職場環境となっていると感じる。

留意点 (1)重点目標と評価項目については、各学校の現状と課題に基づき、実情に合わせて重点化し、設定する。

(2)学校関係者評価については、年度当初に今年度の重点目標の現状と具体的対策を説明し、評価に必要な情報提供を計画的に行う。学校関係者評価実施日とは、最終回の学校評価委員会等を開催し、学校自己評価を踏まえて評価を受けた日とする。